

那覇教区 要理教育書

— 沖縄の風景に聞く、教会のことば —

上巻

第1課～第10課

本書について

本書は、沖縄の風景・歴史・習俗を手がかりに、聖書と教会の教えを読み解く全30課からなる要理教育書です。那覇教区における求道者養成および信徒リーダー（要理教師候補）養成での使用を目的として編まれました。

各課は「一、沖縄の風景から」「二、教会は何を教えるか」「三、日々の生活へ」「四、結びの黙想」という一貫した構成をとり、続けて「◆要理のまとめ」（学びの要点・カテキズム参照・用語解説）と「◆分かち合いの問い」（求道者向け／信徒リーダー向け）を収めています。

「教会は何を教えるか」の章句は、聖書と『カトリック教会のカテキズム』（CCC）を中心とした教会の伝統的な教えを、沖縄の具体的な風景から立ち上がる問いに応答する形で展開しています。

指導者は、参加者の状況に応じて分かち合いの問いを選択し、あるいは両方を織り交ぜて用いることができます。カテキズム参照は、実際の講座で使用する前に一度照合されることをお勧めします。

目次

- 第1課 ひめゆり 「尊厳は失われるのか」
- 第2課 摩文仁 「死者は何を語るのか」
- 第3課 首里城 「焼け落ちたものは甦るのか」
- 第4課 漫湖 「境界に神はいるのか」
- 第5課 コザ 「違う者同士は共に生きられるのか」
- 第6課 北谷 「解放のあとに何を作るのか」
- 第7課 辺野古 「正義はなぜ衝突するのか」
- 第8課 嘉手納 「平和は力なしに守れるのか」
- 第9課 久高島 「誰が中心を決めるのか」
- 第10課 斎場御嶽 「聖なる場所とは何か」

第1課 ひめゆり

テーマ:「尊厳は失われるのか」

一、沖縄の風景から

六月の糸満は、朝から蝉が鳴いています。ひめゆり平和祈念資料館の駐車場に降り立つと、アスファルトの照り返しに、供えられた百合と線香の匂いが混ざって届きます。慰霊碑の前には水のペットボトルが並び、誰かが置いた折り鶴が、風で少し傾いています。碑の奥は、ぽっかりと口を開けたガマです。覗き込んでも、底は見えません。真夏の光の中に、そこだけ夜が残っているように見えます。

資料館に入ると、冷房の静けさが肌に触れます。壁一面に、少女たちの顔写真が並ぶ部屋があります。制服の襟。結んだ髪。カメラをまっすぐ見つめる目。修学旅行の生徒たちが、自分と同じ年頃の顔の前で足を止め、しゃべらなくなります。順路の途中では、生存者の証言映像が流れています。水を求める級友に、水をあげられなかった、という声。

外に出ると、光がまぶしい。蝉はまだ鳴いています。さっきと同じ夏のはずなのに、同じ夏には見えません。

ひめゆり学徒隊の少女たちは、看護要員として戦場に動員されました。壕の中で、麻酔のない手術を押さえ、汚物を運び、死んだ級友の隣で眠りました。証言を読み進めると、どこかで一線を越える場面に会います。人が人として扱われなくなる線。そして、人が自分を人と感じられなくなる線です。

では、その線を越えたとき、尊厳は失われたのでしょうか。剥がされたら終わるものを、私たちは尊厳と呼んでいるのでしょうか。それとも、剥がしても剥がしても残る何かがあるのでしょうか。あるとすれば、それはどこにあるのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

キリスト教は、人間の尊厳について、ひとつの根拠を持っています。創世記の冒頭にある、神は御自分にかたどって人を創造された、という一句です。人間の尊厳は、業績や能力に、また社会がその人を認めるかどうかに関わらず、存在そのものに与えられている。教会が、人間の尊厳は奪えないと言い続けるとき、その根はここにあります。

しかし、この教えだけなら、きれいごとで終わりかねません。壕の中の少女たちに向かって、あなたには神にかたどられた尊厳があります、と語りかける場面を想像してみればいい。それは真実かもしれません。けれども、届かないのです。

教会が二千年間手放さなかったのは、もうひとつ別の場面です。十字架です。

ナザレのイエスは、公開処刑されました。衣服を剥がされ、群衆の見せ物にされ、墓さえ借り物でした。イザヤ書の苦難の僕の歌は、見るべき面影も好ましい容姿もない者として、この人を指す預言として読み継がれてきました。フィリピの信徒への手紙は、キリストが自分を無にして僕の身分になった、と歌う古い賛歌を伝えています。神学はこれをケノーシス、自己無化と呼びます。神の子が、尊厳を剥奪される側にまで降りた、ということです。

ですから教会は、尊厳は失われないという命題を、無傷の場所からは語りません。語る資格がある場所があるとすれば、それは剥奪の底です。総督ピラトが群衆の前で、鞭打たれ、茨の冠をかぶせられたイエスを指して言った言葉が、ヨハネ福音書に残っています。見よ、この人だ。侮辱として発せられたこ

の言葉を、教会は逆さに読んできました。ぼろぼろにされた者を指して、これが人間だ、と言うのです。人間の定義が、力の絶頂においてではなく、剥奪の極みにおいて示される。

それでも、正直に言わなければならないことがあります。尊厳は失われない、というのは、証明できる命題ではありません。壕の闇は深く、証言の中には、信仰の言葉が軽々しく触れてはならない沈黙があります。教会が持っているのは証明ではなく、十字架の傍らに立ち続けるという、賭けに近い信仰です。神が最も深い剥奪の場所にいたのなら、あの壕の闇にも神は不在ではなかった、という賭け。ひめゆりの資料館は、その賭けが安易な慰めに変わることを許さない場所として、今日もそこにあります。

三、日々の生活へ

ガマの闇は、遠い話ではありません。私たちは日常の中で、静かに線を引いています。

病院のベッドで管につながれた親を前に、もう昔の父ではない、とつぶやくとき。認知症が進み、こちらの名前を忘れた祖母に会うのがつらくなるとき。生まれたばかりで何もできない赤ん坊と、寝たきりで何もできなくなった老人とを、無意識のうちに違う目で見るとき。職場で、成果を出せなくなった人の扱いが、少しずつ変わっていくとき。

人間らしさ、という言葉は優しい顔をしています。裏返せば、人間らしくない状態を想定しています。できることが減った人。生産しない人。応答しない人。もし尊厳が業績や能力に宿るのだとしたら、それらを失った人の尊厳は、目減りしていくことになります。ひめゆりの壕で起きたことは、その論理が極限まで走った姿だ、と言えなくもないのです。

だとすれば、問われているのは八十年前の沖縄ではなく、今日の私たちの目です。あなたの家庭で、職場で、教会で、見よ、この人だ、と指されているのは誰でしょうか。その人を、あなたはどんな目で見ているでしょうか。

四、結びの黙想

目を閉じて、思い浮かべてみます。

これまでに、もう人間らしくない、と感じてしまった誰かの顔を。

その線を引いたのは、誰だったでしょうか。

その線の向こう側に、神はいなかったと、言い切れるでしょうか。

問いを抱えたまま、資料館を出ます。蝉は、鳴き続けています。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 人間の尊厳は、業績・能力・生産性に先立って、「神にかたどって造られた」ことそのものに根拠がある(創世記1:27)。
- ・ この教えは、無傷の場所からではなく、剥奪の極み(十字架)から語られるときにのみ、安易な慰めに終わらない。

- ・「見よ、この人だ」(ヨハネ19:5)というピラトの侮辱の言葉を、教会は人間の定義の言葉として読み替えてきた。
- ・ 尊厳の教えは証明できる命題ではなく、十字架の傍らに立ち続けるという信仰の賭けである。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 356-361 人間は神にかたどって造られ、そこに人間の尊厳の根拠がある。

CCC 1700-1706 人間の尊厳は、理性と自由意志を備えた人格として神から与えられている。

CCC 599, 601 イエスの受難は、イザヤ書の「苦難の僕」の預言の成就として理解されてきた。

フィリピ2:6-8 キリストの自己無化(ケノーシス)を歌う古い賛歌。

用語解説

神のかたど(Imago Dei) 人間が神に似せて造られたとする創世記の教え。尊厳の神学的根拠。

ケノーシス ギリシア語で「自己無化」。神の子が自らを無にして人となり、へりくだったこと。

苦難の僕 イザヤ書53章に描かれる、苦しみを担う謎めいた人物。教会は伝統的にキリストの受難の予型として読んできた。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ 「あなたには神にかたどられた尊厳がある」という言葉を、あなた自身はどんなときに信じにくく感じますか。
- ・ あなたの身近で「もう人間らしくない」と感じてしまった経験があれば、無理のない範囲で分かち合ってみましょう。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 教会は「無傷の場所」からではなく「剥奪の極み」から尊厳を語ると本文は述べます。この視点は、司牧の現場(病者訪問、看取り、障がいのある人への奉仕)にどう活かせるでしょうか。
- ・ 尊厳が「証明できる命題ではなく、賭けに近い信仰」であるという言い方は、要理教育の中でどう伝えれば安易な精神論に堕さずに済むでしょうか。

第2課 摩文仁

テーマ:「死者は何を語るのか」

一、沖縄の風景から

六月の摩文仁は、海からの風が強く吹きます。平和祈念公園の芝は刈られたばかりで、青い匂いがします。丘を下ると、黒い花崗岩の屏風が、波のかたちに幾重にも連なっています。平和の礎。二十四万を超える名前が刻まれ、その数は今も増え続けています。

慰霊の日が近づくと、石の前に人が増えます。老いた女性が刻まれた名前を指でなぞり、持参した布で石を拭いています。その並びには朝鮮半島出身者の名前があり、さらに歩けば、米国の州ごとに並んだ兵士の名前があります。日本兵と、沖縄の住民と、米兵と、朝鮮の人々と。殺した側と殺された側とが、同じ黒い石に、同じ書体で刻まれています。

石の切れ目から、海が見えます。摩文仁の崖の下、あの青い海へと、人々は追い詰められました。今日の海は静かで、観光客が写真を撮っています。風だけが、ずっと強いのです。

平和の礎は、国籍を問わず、敵味方の区別なく、軍人と民間人の区別もなく、沖縄戦の戦没者の名前を刻みます。世界でも類例の少ない碑だといいます。

けれども、石の前で立ち止まって考えます。名前を並べられた死者たちは、和解したのでしょうか。それとも、和解したことにされたのでしょうか。生者が、もう恨みはない、と言うとき、その言葉は死者の言葉なのでしょうか、生者の願望なのでしょうか。

死者は語りません。しかしこの石の前に立つと、その沈黙が何かを語っているようにも感じられます。死者は何を語るのでしょうか。あるいは、何を語らずにいるのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

カトリック教会は、信条の中で、聖徒の交わりを告白します。死は交わりの終わりではなく、生者と死者はひとつの共同体に属し続ける、という信仰です。ですから教会は死者のために祈り、死者もまた生者のために執り成すと信じてきました。死者を過去の人にしない、という一点で、この信仰は摩文仁の石と同じ方向を向いています。

ミサの中心には、記念という行為があります。ギリシア語でアナムネーシス。単なる回想ではありません。過去の出来事が、今ここに現前する、という意味を担う言葉です。教会は二千年間、ひとりの死者の名を呼び続けてきました。そして、その死者の記念から、教会という共同体そのものが生まれたのです。名前を呼ぶことが、共同体を作る。摩文仁の石が二十四万の名前を呼び続けるとき、そこにも何かが生きているのかもしれませんが。

ただし教会は、死者の記念が美化に転ぶ危険も知っています。かつての死者ミサでは、怒りの日、と題する続唱が歌われていました。死者を安らかな存在として飾るのではなく、審きの前に立つひとりの人間として、神の憐れみに委ねる歌です。死者のための祈りは、死者の生涯を採点しません。ただ、委ねます。和解の完成を宣言することと、和解を神に委ねて祈ることとは、似ているようで、まったく違うのです。

もうひとつ、正直に認めておくべきことがあります。教会もまた、長い名簿を持ってきました。殉教者名簿です。しかしそれは、基本的に味方の名簿でした。教会のために死んだ者の名を刻む一方で、教会が

迫害した者や、教会の関わった戦争で死んだ敵の名を、並べて刻む碑を、教会は持ってこなかったのです。敵味方を問わず名を刻むという点において、摩文仁の石は、教会がまだ実現したことのない何かを、先に形にしているのかもしれません。

だとすれば、この石の前で教会にできることは、解説ではありません。まず、聞くことです。死者の沈黙に。石を拭く手に。そして、今も増え続ける刻銘に。

三、日々の生活へ

死者との付き合いは、慰霊碑の前だけの話ではありません。

あなたの家庭には、語られない死者がいいるのでしょうか。仏壇の写真のあの人について、家族が口をつぐむ。亡くなり方が語りにくかったのか、生前の確執が解けないままなのか。名前を口にしないことで、家はどうか平穏を保っています。

職場にもいます。辞めた人や亡くなった人の功績が、いつの間にか語られなくなる。もういない人の名前は、議事録から静かに消えていきます。

逆のことも起きます。死者の名前を持ち出して、生者を動かそうとすること。あの人が生きていたら、こう言ったはずだ。死者は反論しませんから、死者の代弁はいつも安全で、そして、いつも少しだけ暴力的です。

平和の礎が教えているのは、名前を刻む、という最小限の行為の重さかもしれません。評価もせず、代弁もせず、ただ名前を残す。いつでも呼べる状態にしておく。和解は、それから先の話であって、その前に来ることはないのです。

四、結びの黙想

あなたには、名前を呼ばなくなった死者がいるのでしょうか。

呼ばないのは、忘れたからでしょうか。それとも、忘れられないからでしょうか。

今夜、ひとつの名前を、声に出さなくてもかまいません、心の中で呼んでみます。

そこから何が始まるかは、まだ分からなくてもよいのです。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 教会は信条において「聖徒の交わり」を告白し、死者と生者がひとつの共同体に属し続けると信じる。
- ・ 死者の記念(アナムネーシス)は単なる回想ではなく、過去の出来事を「今ここ」に現在化させる典礼的な行為である。
- ・ 死者のための祈りは、死者の生涯を採点することではなく、神の憐れみに委ねることである。
- ・ 教会自身も敵味方を問わず名を刻む碑をまだ実現していないという自己吟味が本文に含まれる。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 946-962 聖徒の交わり——地上・煉獄・天国にある教会員の一致。

CCC 958 死者のための祈りは、死者を助けるだけでなく、彼らの執り成しを有効なものとする。

CCC 1032 煉獄にある者たちのための執り成しの祈りとミサ献金。

CCC 1345-1355 ミサの構造の中の記念(アナムネーシス)についての解説。

用語解説

聖徒の交わり 洗礼を受けたすべての人(地上・煉獄・天国)がキリストにおいて結ばれているという信仰箇条。

アナムネーシス ギリシア語で「記念」。過去の救いの出来事を現在に働かせる典礼的想起。

執り成し 他者のために神に祈り願うこと。死者もまた生者のために執り成すと信じられている。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ あなたには、名前を呼ばなくなった死者がいますか。今夜、心の中でその名を呼んでみましょう。
- ・ 「死者のために祈る」ということを、これまでどんなふうにイメージしていましたか。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 「和解の完成を宣言することと、和解を神に委ねて祈ることは違う」という区別は、追悼ミサや年忌のカテキズムでどう説明できるでしょうか。
- ・ 教会が持ってこなかった「敵味方を問わず名を刻む碑」という指摘を、和解の宣教(正義と平和)の観点からどう受け止めますか。

第3課 首里城

テーマ:「焼け落ちたものは甦るのか」

一、沖縄の風景から

首里の坂道は、石畳が濡れると滑ります。歓会門をくぐり、階段を上っていくと、朱色の城壁の向こうに、巨大な素屋根が見えてきます。二〇一九年の秋、正殿は焼け落ちました。いまは、見せる復興と呼ばれる工事が進み、訪れる人は覆いの内側で組み上がっていく木組みを、ガラス越しに見学できます。新しい木材の香りが、こちらまで漂ってくるような気がします。

展示室には、焼け残った大龍柱の頭部が置かれています。黒く焦げ、ひびが入り、それでもなお、龍の顔をしています。修学旅行の生徒が、かわいそう、と小さく言いました。物に向ける言葉ではないはずなのに、誰も訂正しませんでした。

首里城は、歴史の中で幾度も焼けています。失火で、戦火で。そのたびに、建て直されてきました。石垣の上から那覇の街を見下ろすと、クレーンと、瓦屋根と、その先に海。風が通ります。ここに立つと、誰もが少しだけ、王国の時間を生きるのです。

焼けるたびに建て直される城は、同じ城なのでしょう。木材は替わり、職人は替わり、図面にさえ時代ごとの解釈が入ります。それでも人々は、首里城が戻ってくる、と言います。

戻ってくるのは、何なのでしょう。建物でしょうか。記憶でしょうか。それとも、建物を囲んで生きてきた人々の、何かでしょうか。共同体の中心にあるのは、物なのか、人なのか。焼け落ちたものは、甦るのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

エルサレムにも、焼けた聖所の記憶があります。紀元七〇年、ローマ軍によって神殿は崩壊しました。ユダヤの民にとって、神殿は世界の中心でした。その喪失の中から、ユダヤ教は書物と食卓の宗教として生き延びる道を見だし、キリスト教もまた、建物なしでやっていく道を歩き始めたのです。

ヨハネ福音書は、イエスが神殿の境内で語った謎めいた言葉を伝えています。この神殿を壊してみよ、三日で建て直してみせる。福音書記者は注釈を加えます。イエスは、御自分の体のことを言われたのだ、と。中心は、石造りの建物から、ひとりの人格へ、さらにはキリストの体と呼ばれる共同体へと移されていきます。教会を意味するエクレシアという語は、もともと建物を指しません。呼び集められた人々の集会を指します。ですから原理的に言えば、教会は建物をすべて失っても、なお教会でありうるのです。

ところが、話はそう単純には終わりません。教会は二千年間、建物を愛し続けてきたからです。パリのノートルダム大聖堂が燃えたとき、信仰を持たない人々までが涙を流しました。カトリックは受肉の宗教です。神が肉体を取った、と信じる宗教は、物質を、場所を、木や石を、軽んじることができません。聖なるものを描いた像を破壊すべきだ、という論争が古代に吹き荒れたとき、教会は最終的に、物質が聖なるものを担いうる、という側に立ちました。物は、単なる物ではない。祈りの染み込んだ木材は、ただの木材ではないのです。

人は建物ではない、という原理と、物を軽んじない、という感覚。この緊張のただ中に、ひとつの手がかかります。復活したキリストの体には、傷跡が残っていた、と福音書は伝えているのです。疑うトマス

は、その傷に触れるよう招かれました。甦りとは、焼失前への巻き戻しではありません。傷を消すことでもありません。傷ごと、新しくされることです。

首里城の展示室で、あの焦げた龍柱が捨てられずに保存されていることの意味を、私はここから考えたいくなります。新しい正殿が完成しても、黒い龍は、なかったことにはされません。甦るとは、たぶん、そういうことなのです。

三、日々の生活へ

規模は違っても、私たちは似た経験を知っています。

実家が建て替えられて、育った家が消える。母校が統廃合されて、校歌を歌う場所がなくなる。長年通った聖堂が、老朽化で解体される。会社が移転して、あの会議室も、廊下での立ち話の場所もなくなる。そのたびに、誰かが言います。建物はなくなっても、心は残るよ。正しい言葉です。正しいのですが、あの寂しさが何なのかは、その言葉では説明が付きません。

共同体の中心は人だ、と言い切れたら楽でしょう。けれども実際には、人は場所に支えられて、ようやく共同体でいられる面があります。集まる場所を失った集団は、思いのほか早く散っていくものです。

ですから、問いはこうなります。もし、あなたの共同体から建物が失われたら、何が残るでしょうか。その残るものを、あなたたちは普段から育てているでしょうか。そして逆に、建物は立派に残っているのに、中身が空洞になってはいないでしょうか。焼け落ちていないだけで、とつくに失われている中心は、ないでしょうか。

四、結びの黙想

あなたの、首里城はどこでしょう。

失ったら立ち直れない、と感じる場所を、ひとつ思い浮かべてみます。

それが焼け落ちた朝を、想像してみます。

翌日、あなたは誰に会いに行くでしょうか。

その顔ぶれが、たぶん、あなたの共同体です。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 教会(エクレシア)は本来、建物ではなく「呼び集められた人々の集会」を指す語である。
- ・ 神殿の中心は石造りの建物から、キリストの体、さらに教会共同体へと移された(ヨハネ2:19-21)。
- ・ 同時に受肉の宗教であるカトリックは、物質や場所を軽んじることができない——物は聖なるものを担いうる。
- ・ 復活したキリストの体に傷跡が残っていたように、甦りとは傷を消すことではなく、傷ごと新しくされることである。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 751-752 「エクレシア」の語義——呼び集められた民としての教会。

CCC 797-798 教会はキリストの体であり、聖霊の宮である。

CCC 586 イエスと神殿——神殿の意味の成就としてのイエスの体。

CCC 1179-1186 教会堂などの聖なる場所についての教え。

用語解説

エクレシア ギリシア語で「呼び集められた者たち」。教会(Church)の語源で、本来は建物でなく人々の集会を指す。

聖像論争 聖なるものを描いた像を破壊すべきかをめぐる古代教会の論争。教会は物質が聖性を担い
うる側に立った。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ あなたにとっての「首里城」——失ったら立ち直れないと感じる場所は、どこですか。
- ・ その場所が失われたと想像したとき、翌日あなたは誰に会いに行くでしょうか。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 「人は建物ではない」という原理と「物を軽んじない」という感覚の緊張を、聖堂建築や維持管理を
めぐる信徒への説明にどう活かしますか。
- ・ 「建物は立派に残っているのに、中身が空洞になってはいないか」という問いを、自分の所属する
共同体の現状点検にどう用いますか。

第4課 漫湖

テーマ:「境界に神はいるのか」

一、沖縄の風景から

那覇の街の真ん中に、干潟があります。国場川と饒波川が合わさって海に注ぐ手前、漫湖です。頭上をモノレールが走り、国道の車の音は絶えません。その足元で、潮が引くと泥の面が現れます。マングローブの根が絡み合い、トビハゼが跳ね、ミナミコメツキガニの群れが砂の団子を並べていきます。冬にはシギやチドリが渡ってきます。ラムサール条約に登録された湿地が、通勤路の景色の中にあるのです。

水辺に立つと、匂いがします。海の匂いでも、川の匂いでもありません。泥と塩と生き物の混ざった、少し生臭い匂いです。水は濁っていて、お世辞にも美しいとは言えません。橋の上から見下ろす人はいても、わざわざ降りて眺める人は少ないのです。

ここは、汽水域と呼ばれます。淡水と海水が混ざり合う場所。塩分の濃さは潮の満ち引きで刻々と変わり、そこに棲めるのは、その不安定さに耐えられる生き物だけです。そして生態学は言います。汽水域は、地球上で最も生産力の高い環境のひとつなのだ、と。

汽水域は、海でもなく、川でもありません。分類しようとする、どちらでもない、としか言いようがない。見た目は濁り、足場は泥で、中途半端の見本のような場所です。それなのに、いのちの量でいえば、澄んだ海にも清流にも引けを取りません。

混ざること、豊かになることなのでしょう。それとも、汚れることなのでしょう。境界線の上は、神に近い場所なのか、遠い場所なのか。純粋なものを尊ぶ心と、混ざりものの中に湧き上がるいのちと。神は、どちらの側におられるのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

聖書には、清さと汚れをめぐる緻密な体系があります。レビ記を読むと、食べてよい生き物と汚れた生き物、触れてよいものと隔離すべきものが、細かく定められています。その根底にある論理のひとつは、境界の維持だと言われます。区別が保たれていることが清さであり、境界が破られて混ざることが汚れである。この感覚には、私たちも身に覚えがあるはずです。

ところが、福音書のイエスは、この体系を正面から揺さぶる行動を繰り返します。重い皮膚病の人に、手を伸ばして触れる。出血の止まらない女性に触れられて、咎めない。徴税人や罪人と、同じ食卓につく。当時の感覚では、汚れは接触によって移ります。イエスは、汚れる側に立ち続けました。そして言うのです。外から人の中に入るものは、人を汚すことができない、と。

教会の誕生もまた、境界侵犯の物語でした。ユダヤ人の共同体として始まった初代教会に、異邦人が流れ込んでいきます。使徒ペトロは、幻の中で告げられます。神が清めたものを、清くないと言ってはならない。この一句を境に、教会は民族の境界を越えて、混ざり始めました。淡水に、海水が流れ込んだのです。

ですから、こう言ってよいと思います。教会そのものが、汽水域です。聖人と罪人、熱心な者と冷めた者、確信する者と疑いながら残る者が、同じ器の中で混ざっています。アウグスティヌスに連なる伝統は、教会を、麦と毒麦が刈り入れの日まで共に育つ畑として考えてきました。純粋な教会を作ろうとする

運動は、歴史上、幾度も現れました。けれども純血を選んだ共同体は、清くなる代わりに小さく固くなり、やがて、いのちを失っていったのです。

ただし、ここで美談に流れてはなりません。混ざること、汚れることでもあるからです。教会は、世俗の権力と混ざること、富と混ざること、時代の空気と混ざること、福音を見失いもしました。汽水域の豊かさは、濁りと引き換えです。濁りのない豊かさを求めるなら、そこはもう、汽水域ではありません。

恩寵は、どうやら、濁った水の中で働くらしいのです。それが漫湖の泥から見えてくる、教会二千年の風景です。

三、日々の生活へ

あなたの周りの汽水域を、探してみてください。

職場に、中途採用の人が入ってくる。うちのやり方と、前の会社のやり方が混ざって、会議が少しぐしゃくする。結婚して、ふたつの家の文化が混ざり、正月の雑煮の味でもめる。教会に新しい人が来る。長年の暗黙の習慣を知らないその人の振る舞いに、古参の誰かが眉をひそめる。

そのたびに、私たちの中で小さな声がします。濁ってきた、という声です。以前は澄んでいたのに。以前は楽だったのに。その声は、嘘をついていません。実際に、濁ったのです。混ざるとは、そういうことです。

問題は、その先です。濁りを嫌って水門を閉じれば、水は澄みます。そして、少しずつ死んでいきます。濁りを受け入れれば、居心地の悪さは続きます。そして、思いがけないいのちが湧くことがあるのです。

どちらを選ぶかは、それぞれの共同体の自由です。ただ、自分たちがいま選んでいるのだ、という自覚だけは、手放さずにいたいものです。

四、結びの黙想

あなたが最近、濁った、と感じた場所はどこでしょう。

その濁りの中で、何か新しいものが生まれていないか、目を凝らしてみます。

潮は今日も、二度満ちて、二度引いていきます。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ レビ記の清浄規定の根底には「境界の維持＝清さ」という論理がある。
- ・ 福音書のイエスは、汚れる側に立ち続け、この体系を繰り返し揺さぶった（重い皮膚病の人に触れる等）。
- ・ 使徒ペトロの幻（使徒10章）を境に、教会はユダヤ人と異邦人の境界を越えて「混ざり」始めた。
- ・ 教会そのものが汽水域であり、純血を選んだ共同体は清くなる代わりに衰えていったという歴史的教訓がある。

カテキズム（カトリック教会のカテキズム）参照

CCC 781-786 神の民としての教会——すべての民族に開かれた普遍的共同体。

CCC 827 教会は聖なる者でありながら常に清めを必要とする(麦と毒麦のたとえ)。

使徒言行録10章 ペトロの幻——「神が清めたものを清くないと言ってはならない」。

用語解説

汽水域 淡水と海水が混じり合う水域。純粹さと混交、清さと汚れという主題を考える手がかりとなる比喩。

麦と毒麦 マタイ13章のたとえ。刈り入れの日まで善人と悪人が共に育つ教会の現実を示す。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ あなたの周りで、最近「混ざって濁った」と感じる場面はありますか。
- ・ その濁りの中に、思いがけない新しいいのちが芽生えている可能性はないでしょうか。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 「純血を選んだ共同体は、清くなる代わりに小さく固くなり、いのちを失っていった」という歴史認識を、共同体の閉鎖性への警鐘としてどう教えますか。
- ・ 「濁りを受け入れるか、水門を閉じるか」という選択を、多国籍化する信徒共同体の司牧課題に重ねるとどう見えますか。

第5課 コザ

テーマ:「**違う者同士は共に生きられるのか**」

一、沖縄の風景から

コザ。いまの地名では、沖縄市です。嘉手納基地の第二ゲートから延びるゲート通りには、英語の看板が並びます。質屋、タトゥーショップ、ステーキハウス、閉じたままのシャッター、その隣に、新しいコーヒースタンド。夜になれば、ライブハウスからロックが漏れてきます。この街はドルが流通した時代を知っていて、いまでも一部の店は、ドルを受け取ります。

屋のアーケードを歩きます。刺繍屋のウィンドウには、龍と鷺が同居したジャケット。タコス屋の鉄板の匂い。バス停のベンチには、米兵の若い家族と、買い物帰りのおばあが並んで座っています。会話はありません。ただ、隣り合っています。

一九七〇年の十二月、この街で騒動が起きました。米兵の車が起こした人身事故をきっかけに、積もりに積もった怒りが噴き出し、米軍関係の車両が焼かれたのです。コザ騒動。その夜の記憶を、街は消していません。通りの一角には、あの夜を含む街の歩みを伝える展示スペースがあり、街はそれを、自分たちの歴史として引き受けています。

コザは、チャンプルー文化の街、と紹介されます。混ざり合いの街。けれども、その同じ街が、燃えた夜を持っています。

共生、多文化共生、と私たちは言います。言葉は柔らかい。しかしコザに立つと、問いはもっと、ざらざらしてきます。違う者同士は、共に生きられるのでしょうか。共に生きるとは、仲良くすることなのでしょうか。腹を立てながら隣にいても、共生と呼べるのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

初代教会が直面した最大の問題は、教義の論争である前に、食卓でした。ユダヤ人と異邦人が、同じテーブルで食事ができるのか。ユダヤ人には食物の規定があり、異邦人と食卓を囲むこと自体に、深いためらいがありました。ガラテヤの信徒への手紙には、この問題をめぐってペトロとパウロが衝突した場面が、生々しく残っています。教会の二本柱と呼ばれるふたりが、人々の前で言い争ったのです。そして聖書は、その喧嘩を隠さずに載せました。

使徒言行録十五章のエルサレム会議は、異邦人に割礼を求めるか、という難問に決着をつけた会議として知られています。けれどもその結論は、よく読むと妥協案です。原則は譲らず、しかし相手の躓きになる点には配慮する。全員がすっきり納得した形跡はありません。それでも、共同体は割れずに済みました。教会の一致の実態は、最初から、こういうものだったのです。

パウロの手紙の多くは、実のところ、共同体の揉め事の仲裁です。コリントの教会は派閥争いをし、豊かな者と貧しい者が食事の席で分裂し、賜物の優劣を競いました。結婚式で読まれる愛の賛歌、コリントの信徒への手紙一の十三章は、もともと、喧嘩している共同体に宛てて書かれた文章です。愛は忍耐強い、と始まるあの章は、忍耐が現に必要な現場から生まれました。

互いに愛し合いなさい、という戒めを、教会は好意の勧めとしては読んでできませんでした。アガペーと呼ばれる愛は、感情ではなく、実践です。好きになれ、とは命じられていません。相手の善のために行動し

続けよ、と命じられているのです。ですから、腹を立てながら愛することは、矛盾ではありません。むしろ、それが通常運転なのです。

ミサの中に、平和のあいさつがあります。隣の人と会釈を交わす、あの短い所作は、争いようのない者同士の儀礼ではありません。争いうる者、現に争ってきた者同士が、それでも平和を交わす練習です。コザ騒動を消さずに展示するこの街のやり方は、あの所作に、少し似ています。燃えた夜も含めて、共に生きてきた歴史なのだ、と。

三、日々の生活へ

多様性を掲げる組織は増えました。ポスターの中では、背景の違う人々がいつも笑い合っています。けれども現実の共生は、たいてい、笑顔からは始まりません。

外国から来た同僚の、時間感覚の違いに苛立つ。隣人の生活音に、眠れない夜がある。そして忘れがちですが、最も近い他者は、家族です。同じ屋根の下にいても、配偶者は、子どもは、驚くほど違う文化を生きています。

共生を、仲良し、と定義してしまうと、最初の衝突ですべてが崩れます。うまくいかないのは相手が悪いからか、それとも共生が幻想だったのか、の二択になってしまう。けれども、衝突は共生の失敗ではなく、共生の一部だとしたら、どうでしょう。コザの夜も、ペトロとパウロの言い争いも、なかったことにされずに残っています。残っている、ということが、続いてきたことの証拠なのです。

腹の立つ相手と、それでも隣にいる。面倒くささを引き受ける。その派手さのない持久戦を、教会は二千年、愛と呼んできました。

四、結びの黙想

いま、あなたが腹を立てている相手を、ひとり思い浮かべてみます。

その人と、あなたは、共に生きているでしょうか。

明日、和解しなくてもかまいません。

ただ、席を立たない、というところから始まる何かが、あるのかもしれない。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 初代教会最大の課題は教義論争である前に「食卓」——ユダヤ人と異邦人が共に食事できるかという問題だった。
- ・ エルサレム会議(使徒15章)の結論は妥協案であり、全員が納得した形跡はないが、共同体は割れずに済んだ。
- ・ アガペー(愛)は感情ではなく実践であり、「好きになれ」ではなく「相手の善のために行動し続けよ」と命じられている。
- ・ ミサの平和のあいさつは、争いようのない者同士の儀礼ではなく、争いうる者同士が平和を交わす練習である。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 1827 愛(カリタス)はすべての徳の形相であり、感情ではなく意志の実践である。

CCC 1394 ミサにおける平和のあいさつの意味。

使徒言行録**15章** エルサレム会議——異邦人に割礼を求めるかをめぐる決着。

ガラテヤ**2:11-14** ペトロとパウロの衝突——教会の一致は最初から緊張を含んでいた。

用語解説

アガペー ギリシア語の愛の一語。感情ではなく、相手の善を意志し続ける実践としての愛。

エルサレム会議 異邦人への割礼要求をめぐり開かれた初代教会最初期の会議(使徒15章)。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ いま腹を立てている相手を一人思い浮かべてください。その人と、あなたは「共に生きて」いますか。
- ・ 「共生＝仲良し」だと思い込んでいたことはありませんか。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 「衝突は共生の失敗ではなく、共生の一部」という視点は、多文化・多国籍化する信徒共同体の運営にどう活かされますか。
- ・ コリントの信徒への手紙一13章が「喧嘩している共同体」に宛てられた文章だという指摘を、婚姻要理や共同体形成講座でどう用いますか。

第6課 北谷

テーマ:「解放のあとに何を作るのか」

一、沖縄の風景から

夕暮れの北谷は、音楽と潮の匂いでできています。美浜の海沿いには若者が集まり、ウッドデッキで誰かがギターを弾いています。観光客が写真を撮り、日焼けした子どもが走り回る。夕日は東シナ海に沈み、空はしばらくのあいだ、燃えるような色になります。

この賑わいの足元には、かつて滑走路がありました。ここは米軍ハンビー飛行場などの跡地です。一九八一年に返還され、区画整理を経て、いまでは県内有数の商業地になりました。古い地図を重ねてみると、かつての滑走路の上を、いま人々が買い物袋を提げて歩いています。

案内板の前で足を止める人は、多くありません。それでいいのかもしれませんが。街は、過去を陳列するためではなく、生きるためにあるのですから。ただ、夕日を眺めながら、ふと思うのです。ここは、立ち入れない土地でした。フェンスが消え、人々が戻ってきて、そして建ったのは、ショッピングモールだったのです。

基地の返還は、しばしば、解放、と語られます。奪われた土地が戻る。フェンスが消える。では、解放のあとには、何が来るのでしょうか。

北谷の出したひとつの答えは、消費の街でした。それを、基地の占領のあとに資本の占領が来た、と苦い顔で言う人もいます。けれども一方で、雇用が生まれ、若者が集まり、街は明るくなりました。それを占領と呼ぶのは、公平でしょうか。

解放は、目的地なのでしょうか。それとも、そこから何を作るのかを問われる、出発点なのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

聖書における解放の物語といえば、出エジプト記です。奴隷の家エジプトから、神は民を導き出されました。ここまでは、よく知られています。あまり注目されないのは、その続きです。解放された民は、荒れ野で不平を言い始めるのです。エジプトで肉のたくさん入った鍋を囲んでいた頃が恋しい、と。そしてモーセが山に登っている間に、金の子牛を鑄て、それを拝みました。

解放は、空白を作ります。そして空白は、必ず何かで埋まります。奴隷労働の消えた場所に、別の主人が滑り込んでくる。金の子牛の物語は、偶像礼拝の話である前に、自由に耐えられない人間の話なのです。

ですから出エジプトの物語では、解放のあとに、律法が与えられます。十戒は、自由を奪う規則としてではなく、自由を守るための枠組みとして読まれてきました。そして興味深いことに、その中には、休め、という戒めがあります。安息日です。奴隷は、休めません。休むことは、もう奴隷ではないことの、何よりの実践でした。解放された者に与えられた最初の課題が、労働でも建設でもなく、休息だったのです。

パウロは、ガラテヤの信徒への手紙で書いています。自由を得させるために、キリストは私たちを解放してくださった。だから、この自由を、肉に罪を犯させる機会としてはならない、と。何かからの自由は、何かへの自由を持たなければ、次の隷属へと流れ込んでいきます。何から自由になったかよりも、何のために自由になったのか、が問われているのです。

アウグスティヌスは、人間の心を、欲望の束として見つめた人でした。彼の残した有名な祈りがあります。あなたのうちに憩うまで、私たちの心は安らぎを得ない。彼にとって、欲望そのものは悪ではありませんでした。問題は、欲望の向かう順序です。カトリックの社会教説も、市場や消費を頭ごなしに断罪はしません。市場は、人間の創意と交わりの場でもあります。ただし市場は、それ自体では、何のために、を教えてくださいません。滑走路の跡にモールを建てることはできます。けれどもモールは、そこで人が何のために生きるのかまでは、売っていないのです。

三、日々の生活へ

これが終わったら自由になれる、と、私たちは何度も思ってきました。受験が終わったら。この案件が片付いたら。子育てが一段落したら。定年になったら。

そして、その日が来ます。多くの人が、戸惑います。手に入れた自由が、思っていたより、空白に似ているからです。定年後の朝、何をしたいか分からない。長期休暇の三日目に、もう退屈している。空白は不安なので、私たちは急いで埋めます。予定で、買い物で、動画で、酒で。そして、埋めたものが新しい主人になることも、珍しくありません。

北谷の夕日は美しい。あの街に、責められるべきものは何もありません。問われているのは、街ではなく、解放を待ちわびている私たち自身です。あなたがいま、これさえ終われば、と思っている、その先に、あなたは何を建てるつもりでしょうか。図面はあるでしょうか。図面のないまま更地になったとき、最初に建つのは、たいてい、いちばん手軽なものなのです。

四、結びの黙想

あなたがいま、解放されたいと思っていることを、ひとつ挙げてみます。

解放された翌朝、あなたは何をしますでしょう。

その朝の過ごし方を、具体的に思い描いてみます。

描けないとしたら、足りていないのは、鎖のほうではないのかもしれませんが。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 出エジプトの物語では、解放は目的地ではなく、そこから何を作るのかが問われる出発点として描かれる。
- ・ 解放された民は荒れ野で不平を言い、金の子牛を拝んだ——自由に耐えられない人間の姿がそこにある。
- ・ 十戒とりわけ安息日の掟は、自由を奪う規則ではなく、自由を守るための枠組みとして与えられた。
- ・ 何から自由になったかより、何のために自由になったのかが問われている（ガラテヤ5:13）。

カテキズム（カトリック教会のカテキズム）参照

CCC 2057-2063 十戒は、エジプトの奴隷状態から解放された民への神の応答として与えられた。

CCC 2168-2173 安息日の意義——休むことは奴隷ではないことの実践である。

CCC 1731-1738 人間の自由と責任について。

ガラテヤ5:13 「自由を得させるために、キリストは私たちを解放してくださった」。

用語解説

金の子牛 出エジプト記32章。解放された民が造った偶像。空白に耐えられない人間の姿を象徴する。

安息日 労働を休む神の掟。奴隷にはできない「休む」ことを、自由の実践として位置づける。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ いま「これさえ終われば自由になれる」と思っていることを一つ挙げてみましょう。
- ・ 解放された翌朝、あなたは具体的に何をするか、思い描けますか。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 「解放は空白を作り、空白は必ず何かで埋まる」という洞察を、卒業・退職・子育て終了などの人生の節目に立つ信徒への同伴にどう活かしますか。
- ・ 安息日の教えを、現代の「忙しさを美德とする」文化への対抗としてどう説教・講話に組み込みますか。

第7課 辺野古

テーマ:「正義はなぜ衝突するのか」

一、沖縄の風景から

名護市辺野古。キャンプ・シュワブのゲート前に、テントがあります。座り込みの日数を数える看板の数字は、四千日を超えました。

辺野古の集落は、静かです。商店の軒先、公民館、御嶽。海に出ると、大浦湾の青が広がります。ジュゴンが藻場に通っていたと言われる海。埋め立ての区域では、台船が土砂を運んでいます。フェンスの金網には、色のあせたりボンが、いくつも結ばれたままになっています。

ゲート前では、機動隊員と座り込みの人々が、もう何年も、決まった時刻に、決まった手順で向き合っています。怒号の飛ぶ日もあれば、奇妙に穏やかな日もあるといいます。そして集落の中には、この問題の賛否を軽々しく口にしない空気がある、と聞きます。家族の中でさえ、意見が割れるからです。

海は、今日も青い。その青さは、どちらの味方もしません。

辺野古を語る言葉は、たいてい、対立の構図でできています。国と沖縄。推進と反対。けれども現場に近づくほど、構図はもっと細かく割れていることに気づきます。

安全保障を真剣に考える人の正義。民意を踏みにじられたと感じる人の正義。集落の静かな暮らしを守りたい人の正義。海のいのちを守りたい人の正義。そして、基地に関わる仕事で家族を養う人の、生活という正義。

どれも、嘘ではありません。正義が複数あって、互いに衝突しています。なぜ、正義はひとつではないのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

教会は、正義について考え続けてきました。トマス・アキナスは、正義を徳のひとつに数えます。徳とは、規則を機械的に当てはめる能力ではなく、具体的な状況の中で善を見極めて行為する力です。ですからトマスは、正義と並んで、賢慮という徳を重んじました。原則を知っていることと、この状況で何をなすべきかが分かることは、別の能力なのです。正義が現場で衝突するのは、正義が原則のままでは着地できず、賢慮という不確かな橋を渡らなければならないからです。

もうひとつ、教会が大切にしてきたものに、良心があります。第二バチカン公会議は、良心を、人間の最も奥深い聖所と呼びました。人はそこで、神の声を聴きます。そして教会は、良心は誤りうる、と認めながらも、人は自らの良心に従わなければならない、と教えてきました。ここから、避けがたい帰結がひとつ生じます。ふたりの誠実な人間が、それぞれ真剣に良心に問うた結果として、正反対の結論に達することがありうる、ということです。どちらかが不誠実だからではありません。誠実さは、結論の一致を保証しないのです。

教会自身の歴史が、それを示しています。戦争と平和をめぐる、教会の中には、正戦の伝統と非暴力の伝統とが、二千年間、並んで存在してきました。教会は良心的兵役拒否者を支持し、同時に、従軍する兵士のもとにチャプレンを送ってきました。矛盾といえば、矛盾です。けれども教会は、この矛盾を安易に解消してしまうよりも、両方の良心を抱え続けることを選んできたのです。

詩編八五編に、こういう一節があります。慈しみとまことは出会い、正義と平和は口づけする。美しい詩句です。けれども裏を返せば、この世界では、正義と平和がしばしば出会わず、口づけしていないからこそ、詩人はこれを祈りとして歌ったのです。正義同士の衝突が最終的に和解する場所を、教会は、自分の会議室の中ではなく、神のうちに見てきました。それは責任逃れではありません。人間の手の中で正義を一本に束ねようとした試みが、歴史の中で何を生んできたかを、教会は知っているからです。

三、日々の生活へ

ですから、辺野古の海の前で教会に言えることは、多くありません。ただ、対立するどちらの側にも、誠実な苦悩がありうる、という一点を手放さないこと。それは、立場を持たないことではありません。相手を悪魔にしないままで立場を持つ、という、最も難しい道です。

正義の衝突は、国政の問題である前に、台所の問題です。

親の介護を、きょうだいの誰が引き受けるか。引き取るべきだと言う姉の正義と、施設を勧める弟の正義。職場では、成果に報いるべきだという正義と、年功と生活を守るべきだという正義。教会の中でも、伝統を守ろうとする正義と、刷新を求める正義がぶつかります。

そのとき私たちは、相手の結論だけを見て、相手の良心を見ません。あの人は分かっている。あの人は不誠実だ。相手を不誠実と見なした瞬間に、対話は死にます。あとに残るのは、力比べだけです。

逆に、相手の内側にも誠実な苦悩があると認めることは、敗北ではありません。合意できないままで、相手を人間として扱い続けるための、最低限の橋です。その橋さえ残っていれば、対立は不毛とは限りません。橋が落ちれば、正しいのはいつも、声の大きいほうになるのです。

四、結びの黙想

あなたが対立している人を、ひとり思い浮かべてみます。

その人の正義を、その人の内側から、一度だけ眺めてみます。

納得しなくてもかまいません。

ただ、そこにも苦悩があるかどうかだけを、見てくるのです。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 現場に近づくほど、対立の構図は「国と沖縄」のような単純な二項ではなく、複数の誠実な正義に割れていく。
- ・ トマス・アキナスにとって正義は徳の一つであり、原則の知識と「この状況で何をなすべきか」を判断する賢慮とは別の能力である。
- ・ 第二バチカン公会議は良心を「人間の最も奥深い聖所」と呼び、良心は誤りうるとしても人はそれに従わねばならないと教える。
- ・ 教会は正戦の伝統と非暴力の伝統を二千年間並べて抱え、矛盾を安易に解消してこなかった。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 1776-1802 道徳的良心についての教え——「人間の最も秘められた核心、聖所」(現代世界憲章16項)。

CCC 1805-1809 枢要徳としての賢慮・正義・剛毅・節制。

CCC 2302-2317 平和の擁護と正当防衛の倫理。

詩編85:11 「慈しみとまことは出会い、正義と平和は口づけする」。

用語解説

良心 神の声を聴く人間の最も奥深い場所。誤りうるが、従うべきものとされる。

賢慮 原則を具体的状況の中で適用し、善を見極めて行為する徳(枢要徳の一つ)。

正戦論 戦争が正当化されうる条件を絞り込み、暴力に歯止めをかけようとした神学的伝統。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ いま対立している人を一人思い浮かべ、その人の正義をその人の内側から眺めてみましょう。
- ・ 納得できなくても構いません。そこに苦悩があるかどうかだけ、見つめてみましょう。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 「誠実さは結論の一致を保証しない」という良心理解を、教会内の意見対立(典礼刷新、社会問題など)にどう適用しますか。
- ・ 正戦論と非暴力の伝統を「矛盾のまま抱え続ける」教会の姿勢を、平和教育のプログラムにどう位置づけますか。

第8課 嘉手納

テーマ:「平和は力なしに守れるのか」

一、沖縄の風景から

道の駅かでなの展望フロアに上がると、フェンスの向こうに、滑走路が広がっています。極東最大級と呼ばれる嘉手納基地です。双眼鏡を構える航空ファンがいて、修学旅行の列があり、案内板の前ではガイドの声がします。

戦闘機が、上がります。来ると分かっている、体がすくみます。腹の底を殴られるような轟音が空を裂き、会話が途切れ、誰もが口を閉じて機影を目で追います。飛び去ると、拍子抜けするほど静かな午後が戻ってきます。ガイドが話を再開します。町の面積の八割以上が基地である、という説明を、次の轟音がまた遮ります。

この音の下で、人が暮らしています。学校があり、産院があり、畑があります。うるさい、と言う人がいて、慣れた、と言う人がいて、この音が平和を守っているのだ、と言う人がいます。同じ音を、聞きながら。

嘉手納の滑走路を、ある人は、抑止力、と呼びます。ある人は、戦争の道具、と呼びます。呼び名は違っても、そこにあるのは、剥き出しの力です。

平和は、力なしに守れるのでしょうか。守れる、と答えれば、では目の前の脅威にどう向き合うのか、と問われます。守れない、と答えれば、では力はどこまで許されるのか、と問われます。誰もが即答したが、この問いを、二千年かけて、まだ答え終わらないでいる共同体があります。教会です。

二、教会は何を教えるか

聖書そのものが、この問いをめぐって緊張を抱えています。イエスは言われました。剣を取る者は皆、剣で滅びる。敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。一方でパウロは、ローマの信徒への手紙で、権威は神に由来する、権威がいたずらに剣を帯びているのではない、と書きました。初代の教会には、洗礼を受けた者は人を殺す職務に就くべきではない、と考える伝統が根強くありました。

転機は、四世紀に来ます。帝国がキリスト教を公認し、やがて事実上の国教とすると、教会は問われることになりました。統治の責任を分かち持つ者として、暴力とどう向き合うのか。アウグスティヌスを選んだのは、戦争が正当でありうる条件を絞り込む、という道でした。正しい理由。正しい意図。最後の手段。のちに正戦論と呼ばれるこの伝統は、戦争の免罪符ではなく、本来は、戦争への歯止めとして組み立てられたものです。中世の教会は、神の平和、神の休戦、と呼ばれる運動によって、戦ってよい日や、傷つけてはならない人々を定め、暴力を囲い込もうとしました。

二十世紀、ふたつの世界大戦と核兵器の出現が、この伝統を根底から揺さぶりました。第二バチカン公会議は、都市全体の破壊を狙うような戦争行為を、明確に断罪しました。ヨハネ二十三世は、回勅、地上の平和、で、軍拡競争の論理そのものを問いました。そして近年、教皇フランシスコは、もはや正しい戦争を語ることは非常に困難だ、というところまで踏み込み、核兵器についても、使用のみならず保有そのものの倫理性を、広島で問い直したのです。

では、教会は平和主義に決着したのでしょうか。そうとも、言い切れません。教会はいまも、国家には正当防衛の権利と義務がある、と教えてもいます。良心的兵役拒否者を支持しながら、軍隊にチャプレン

を派遣し続けています。二千年の議論の現在地は、明快な一行の答えではありません。少しずつ削り込まれてきた、問いの束です。力に、どこまで頼ってよいのか。頼らないとき、その代償を、誰が払うのか。

嘉手納の轟音は、ですから、教会にとって他人事の音ではありません。あれは、教会がまだ書き終えていない宿題が、空を飛んでいる音でもあるのです。

三、日々の生活へ

この問いを、国家の規模から、日常の背丈にまで降ろしてみます。

子どもが、いじめられている。話し合いで解決すべきだと思う。けれども、今夜も殴られているのだとしたら、力づくで引き離すことを、あなたはためらうでしょうか。職場のハラスメントに、穏やかな注意では足りない相手がいる。処分という力を使うことは、敗北でしょうか、それとも責任でしょうか。

家庭にも、学校にも、教会にも、小さな嘉手納があります。守るために構えた力が、いつの間にか支配に変わっていく危うさも、含めて。力をすべて手放した人は清い。けれどもその清さの代償を、しばしば、別の誰かが払います。力に頼りきった人は安全です。けれどもその安全の中で、何かが確実に、痩せていきます。

理想と責任のあいだで、答えを保留しながら、それでも誠実であり続けること。教会が二千年やってきたのは、結局、それなのかもしれません。二千年かけてよいのなら、私たちも、今夜ひと晩で答えを出さなくてもいいはずです。ただし、問いを手放さない、という条件つきで。

四、結びの黙想

あなたは、誰かを守るために、力を使ったことがあるでしょうか。

あるいは、使わなかったことで、誰かに代償を払わせたことが。

どちらの記憶も、裁かずに、ただ神の前に置いてみます。

轟音のあとの、静けさの中で。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 聖書自体が、剣を捨てよという教えと、権威は神に由来するという教えの間に緊張を抱えている。
- ・ アウグスティヌスの正戦論は、戦争の免罪符ではなく、本来は戦争への歯止めとして組み立てられた。
- ・ 第二バチカン公会議は都市全体の破壊を狙う戦争行為を明確に断罪し、教皇フランシスコは核兵器の保有そのものの倫理性を広島で問い直した。
- ・ 教会は平和主義に決着したわけではなく、正当防衛の権利を教えながら良心的兵役拒否者も支持し続けている。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 2302-2306 平和——暴力の回避と正義の希求。

CCC 2307-2317 戦争の回避、正当防衛の要件、無差別破壊兵器への断罪、軍拡競争への警鐘。

CCC 2265-2266 国家・共同体の正当防衛の権利。

用語解説

正戦論 戦争が正当化されうる厳格な条件(正しい理由・意図・最終手段等)を定める伝統。

良心的兵役拒否 信仰上の理由から軍務を拒否する権利。教会は伝統的にこれを支持してきた。

神の平和・神の休戦 中世の教会が暴力を制限しようとした運動。戦ってよい日や守るべき人々を定めた。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ あなたは誰かを守るために力を使ったこと、あるいは使わずに誰かに代償を払わせたことがありますか。
- ・ その記憶を、裁かずに、ただ神の前に置いてみましょう。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 「二千年かけてよいのなら、私たちも今夜ひと晩で答えを出さなくてもいい。ただし問いを手放さない」という姿勢を、平和主日の説教にどう活かせますか。
- ・ 教皇フランシスコの広島でのメッセージ(核兵器の保有そのものの倫理性)を、地域の平和学習とどう結びつけますか。

第9課 久高島

テーマ:「誰が中心を決めるのか」

一、沖縄の風景から

安座真港から、フェリーで十五分ほど。久高島は、細長く、低く、飾り気のない島です。港に降りると、集落の白い道が続きます。低い石垣、フクギの並木、自転車を漕いでいく観光客。畑が広がり、海はどこまでも浅く、明るいのです。

島の奥に、フボー御嶽があります。琉球の開闢神話に連なる、最も重い聖地のひとつです。いまは何人も立ち入りが禁じられていて、入口には、その旨を告げる静かな看板が立っているだけです。中は、見えません。ただ、木々が深く茂っていることが分かるだけです。

かつて琉球の国王は、この島に巡礼しました。のちの時代には、本島南部の斎場御嶽から、海の彼方のこの島を遥拝したといえます。王都の壮麗な正殿に住む王が、東の海に浮かぶこの小さな島に向かって、頭を垂れたのです。地図の上では紛れもない離島、周縁の島。その島が、王国の信仰の中心でした。

中心とは、普通、力の集まる場所を指します。人口、富、権力、情報。首里は王国の中心であり、東京は日本の中心であり、私たちは無意識のうちに、大きくて強い場所を、中心と呼んでいます。

けれども琉球の王は、周縁の小島を仰ぎました。中心が、周縁を拝んだのです。

誰が、何が、中心を決めるのでしょうか。中心とは、力の所在地のことなのでしょうか。それとも、まったく別の論理が、ありうるのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

福音書を開くと、奇妙なことに気づきます。神の子の物語が、ことごとく、周縁から始まっているのです。

生まれたのは、ベツレヘム。預言者ミカが、ユダの氏族の中でいと小さき者、と呼んだ町です。育ったのは、ガリラヤのナザレ。ナザレから何か良いものが出るだろうか、と言われた土地です。エルサレムという宗教的中心は、この物語の中で、イエスを迎え入れる場所としてではなく、十字架につける場所として登場します。しかも処刑場は、城壁の外でした。中心の、さらに外です。

母マリアの歌う賛歌は、それを先取りしていました。権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げる神。パウロも書いています。神は、世の無に等しい者、身分の卑しい者を、あえて選ばれた、と。聖書の神は一貫して、中心の論理をひっくり返す側に現れるのです。

ただし、ここで注意したいのです。これは、これからは周縁こそが新しい中心だ、という話ではありません。周縁を持ち上げて玉座に据えれば、それはただの席替えであって、中心の論理そのものは、無傷のまま残ります。教会自身が、その罫にはまった歴史を持っています。帝国の周縁に生まれた、迫害される少数派が、やがて帝国の中心に座ったとき、教会は多くのものを得て、そして、何か決定的なものを失いかけてました。福音は周縁から始まる、という命題は、教会が自らの成功によって裏切りうる命題なのです。

久高島が指し示しているのは、もうひとつ深い論理かもしれません。フボー御嶽は、誰も入れないことによって、聖地であり続けています。中心が、空白なのです。所有されず、占拠されず、覗き込むことさえ

許されない。思えば、イスラエルの神殿の至聖所も、年に一度、大祭司ひとりしか入れませんでした。その最奥は、像のない、空の空間でした。真の中心とは、誰かがそこに座するための椅子ではなく、誰も座れない空白として守られる何かなのではないでしょうか。人が座った瞬間に、それは中心ではなく、ただの権力になるのです。

三、日々の生活へ

あなたの属する共同体の、中心はどこでしょう。

会社の中心は、本社でしょうか、それとも現場でしょうか。会議で、中心的なメンバー、と言うとき、誰かがそっと周縁に押し出されています。家庭の中心は、稼ぐ人でしょうか、家事を担う人でしょうか、いちばん手のかかる人でしょうか。教会の中心は、祭壇でしょうか、司祭でしょうか、役員会でしょうか。それとも、もう長いこと顔を見ていない、あの人でしょうか。

福音の論理に従うなら、共同体の健康診断の方法は、ひとつしかありません。いちばん端にいる人の席から、全体を眺めてみることです。新しく来た人、うまく馴染めない人、声の小さい人、来なくなった人。その席から見て居心地のよい共同体は、たぶん、健康です。その席から中心がまるで見えないなら、その中心は、少しずつ玉座に似てきているのかもしれません。

そして、ときどき思い出したいのです。私たちが本当に拝むべき中心は、手で握れる何かではなく、フボー御嶽の森のように、立ち入ることを許さない奥行きなのだ、ということ。

四、結びの黙想

あなたの共同体で、いちばん周縁にいるのは、誰でしょう。

今週、一度だけ、その人の席から全体を眺めてみます。

そこから見えた景色を、誰かに話す前に、まず、神に報告してみるのです。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 琉球の王は、地図上の周縁である久高島を国王自らが巡礼し、後には遥拝するようになった——中心が周縁を拝んだ。
- ・ 福音書の神の子の物語は、ベツレヘム・ナザレ・十字架と、ことごとく周縁から始まっている。
- ・ マリアの賛歌(マグニフィカト)は「権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げる神」を歌う。
- ・ 周縁を新しい中心に据えることは席替えに過ぎず、久高島のフボー御嶽が示すのは「誰も座れない空白」としての中心である。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 544 神の国は貧しい人・小さい者に属する。

CCC 2443-2449 貧しい人々への愛——教会の一貫した優先的配慮。

ルカ1:46-55 マグニフィカト(マリアの賛歌)。

CCC 517 ナザレでのイエスの隠れた生活の意味。

用語解説

マグニフィカト ルカ福音書1章のマリアの賛歌。権力の逆転を歌う。

フボー御嶽 久高島にある琉球開闢神話に連なる聖地。何人も立ち入れない「空白の中心」。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ あなたの属する共同体で、いちばん周縁にいるのは誰でしょうか。
- ・ 今週一度だけ、その人の席から全体を眺めてみましょう。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 「福音は周縁から始まる、という命題は、教会が自らの成功によって裏切りうる」という指摘を、教会の制度化・権力化への自己吟味にどう活かせますか。
- ・ 「共同体の健康診断は、いちばん端にいる人の席から全体を眺めること」という提案を、実際の小教区の現状評価にどう応用できますか。

第10課 斎場御嶽

テーマ:「聖なる場所とは何か」

一、沖縄の風景から

南城市、斎場御嶽。入口から、緑のトンネルのような参道を上っていきます。ガジュマルとクワズイモ、湿った石灰岩、鳥の声。参道の脇には、沖縄戦の艦砲弾が穿ったという池が、いまでも静かに水をたたえています。

大庫理、寄満と拝所を巡り、最奥へ。三庫理です。巨大な岩がふたつ、寄りかかり合ってできた三角形の空間。その下を抜けると、木々の間から海が見え、その先に、久高島が横たわっています。

足元には、香炉。それだけです。社殿はありません。像也没有。祭壇も、黄金もない。岩と、樹と、光と、海への視線だけです。それなのに、三角の岩の下をくぐるとき、多くの人々が、自然と声を落とします。誰に言われたわけでもないのに。

一方で、ここは人気の観光地でもあります。列を作る団体客、自撮り棒、パワースポットという言葉。静かにお参りください、と記された看板。聖地は今日も、祈る人と、消費する人とを、同時に迎えています。

ここには、聖なる場所の装置が、何もありません。建築も、像も、宝物もない。あるのは、岩の裂け目と光だけです。それでも人は、ここで何かを感じて、声を落とします。

聖なる場所とは、何なのでしょう。聖性は、建物に宿るのでしょうか。岩に宿るのでしょうか。それとも、場所そのものではない何かに宿っているのでしょうか。だとしたら、それは、何なのでしょう。

二、教会は何を教えるか

聖書の中で、聖なる場所についての理解は、ゆっくりと変化していきます。

始まりは、石でした。旅の途中のヤコブは、石を枕に眠り、夢に神を見て、目覚めて言います。ここは神の家だ。彼はその石を立てて、記念としました。特別な出来事が起きた場所が、聖所になる。素朴で、力強い感覚です。

やがて民は、幕屋を持ちます。移動式の聖所です。荒れ野を旅する民とともに、聖所も動きました。定住して王国ができると、ソロモンが神殿を建てます。けれども、その献堂の祈りの中で、王自身が、こう言うのです。天も、天の天も、あなたをお納めすることはできない。まして、私の建てたこの家など。建てた本人が、建物は神を容れられない、と告白しています。

新約に入ると、この線は、さらに徹底されます。最初の殉教者ステファノは、いと高き方は人の手で造ったものにはお住みにならない、と語って、殺されました。イエス御自身は、サマリアの女性に言われました。この山でもエルサレムでもなく、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る、と。そして、マタイ福音書の一句。ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる。聖性の座は、建築から、集まる人々のあいだへ、関係の中へと、移されていくのです。

それなら、教会堂など要らないのでしょうか。そうは、なりません。教会は聖堂を建て続け、奉献式という典礼によって、建物を聖別してきました。ただし、その典礼が語るのは、建物それ自体の魔力ではありません。この石の建物は、生ける石である共同体のしるしなのだ、という論理です。場所は、関係

を担い、記憶を蓄え、祈りを支えます。受肉の宗教は、どこでもいい、とは言いません。しかし、ここでないといけない、とも言いきりません。場所は聖性の器であって、聖性の源ではないのです。

斎場御嶽に社殿がないことは、ですから、欠如ではないのでしょう。ここで人々が何百年も守ってきたのは、建築ではなく、拝所と、海の彼方の久高島と、祈る者とを結ぶ、視線の関係です。そして今日、この聖地を守っているのも、柵や入場料ではなく、岩の下で声を落とす、あのひとりひとりの礼です。聖性は、たしかに消費されえます。けれども、礼をもって立つ人がひとりいる限り、場所は、聖地であり続けるのです。

三、日々の生活へ

あなたの家に、聖なる場所はあるでしょうか。

仏壇。亡くなった人の写真の前。子どもの背丈を刻んだ柱。理由をうまく説明できないのに、粗末に扱えない場所。引っ越しのとき、最後まで段ボールに入れられなかった物。それらは、物や場所そのものが偉いわけではありません。そこに関係が宿っているから、触れ方が変わるのです。

現代は、あらゆるものがアクセス可能であることを、良しとします。二十四時間開いていて、誰でも入れて、写真に撮れて、共有できる。その便利さの中で、私たちは、触れないものを持つ能力を、少しずつ失っているのかもしれませんが。聖別するとは、区別することです。ここから先は違う、と線を引き、その線の前で、振る舞いを変えること。

週に一度、あるいは一日に数分でも、声を落とす場所と時間を持つこと。それは逃避ではありません。すべてが等価で、交換可能だという世界観への、静かな異議申し立てです。

四、結びの黙想

あなたが、靴を脱ぐような気持ちで近づく場所は、どこでしょう。

そこであなたは、何と、誰と、関係しているのでしょうか。

今度その場所に立つとき、ほんの少しだけ長く、黙ってみます。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 聖書における聖なる場所の理解は、石(ヤコブの記念)から幕屋、神殿へと変化し、新約でさらに徹底される。
- ・ ソロモン自身が神殿奉献の祈りで「天も、天の天も、あなたをお納めすることはできない」と告白している。
- ・ イエスはサマリアの女性に、この山でもエルサレムでもなく「霊と真理をもって父を礼拝する時が来る」と語った。
- ・ 教会は聖堂を建て続けるが、それは建物の魔力ではなく「生ける石である共同体のしるし」としてである。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 1179-1186 教会堂——祈りのための場としての教会堂の意義と奉献式。

CCC 1179 「祈るためには『部屋』が必要」——霊と真理による礼拝と物理的空間の両立。

ヨハネ4:21-24 サマリアの女性との対話——霊と真理による礼拝。

用語解説

幕屋 荒れ野を旅する民とともに移動した仮設の聖所。

奉献式 教会堂を聖別する典礼。建物そのものではなく、共同体のしるしとして聖別する。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ あなたが靴を脱ぐような気持ちで近づく場所はどこですか。
- ・ そこで、あなたは何と、誰と関係していますか。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 「場所が聖性の器であって、聖性の源ではない」という区別を、聖堂建設や巡礼地信仰の司牧的指導にどう活かせますか。
- ・ 「すべてが等価で交換可能だという世界観への静かな異議申し立て」としての聖別を、現代的な霊性教育にどう展開できますか。